



令和6年9月4日(水)

とかねっと通信 第7号

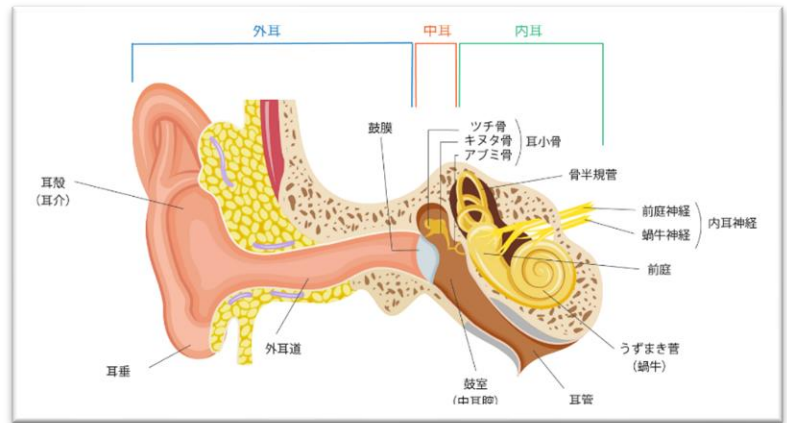
文責:北海道帯広聾学校

コーディネーター : 中・森田・有江

難聴いろいろ

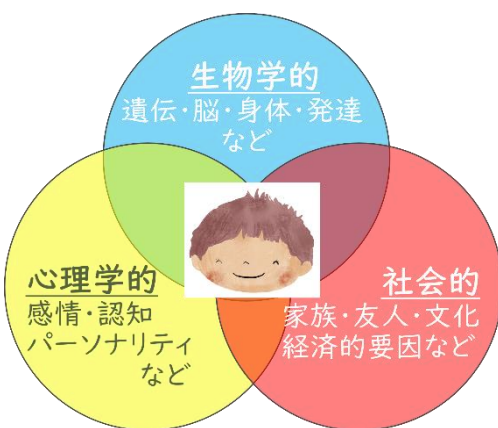
難聴と一口にいっても実はたくさんの種類があります。今回はその中からいくつかをご紹介します。難聴は音(空気の振動)が通る経路のいずれかに異常が起こることによって発症すると考えられています。大きく分けると“感音難聴”と“伝音難聴”があります。伝音難聴は外耳と中耳の疾患で起こります。音の伝わり方に問題が起こりますので、音がそのまま小さくなった聞こえ方をします。感音難聴は内耳で神経の音の感じ方に問題が起こりますので、音が小さく聞こえるだけでなく、ひずんで聞こえたり大きな音をうるさく感じたりすることがあります。難聴の種類によって英語のリスニングや、話し合い活動での配慮が異なってきます。また近年では“聞き取り困難症・聴覚情報処理障害(LiD/APD)”といって純音聴力検査では正常範囲ながら騒音下での語音の聞き取りや、早口音声、グループでの会話などで聞き取りに困難さが見られるお子さんが多数報告されています。この他にも心因性難聴や一側性難聴などもあります。聞こえに関してご不明な点がございましたらいつでも聾学校にご相談ください。

図:さくら補聴器センター



参考文献:こどもの難聴診療マニュアル(日本医事新報社)、こどものきこえ小百科(さっぽろ子どもの聞こえ相談ネットワークを作る会)

アセスメントについて



お子さんの支援を考えると多面的にアセスメントすることで支援の手立てが講じやすくなります。課題は複数の要因が絡むことが多く、それぞれの要因が相互に影響すること多いため複雑なものになりがちです。それらを理解するために、生物学的要因、心理学的要因、社会的要因の3つから総合的にアセスメントしていきます。

生物学的要因は、脳や遺伝子などの要素です。例えば、自閉スペクトラム症や ADHD (注意欠如多動症)などは、生まれながらの脳の疾患であり遺伝的、発達の背景があります。

心理学的要因とは、例えば個人の考え方や価値観といったメンタルの影響などです。よくある例えですが、コップに半分まで水が入っているのを見て、「半分しか水が入っていない」とネガティブに捉えるか、「半分も水が入っている」とポジティブに捉えるかで気持ちは変わります。また、自尊心、ストレスを処理する能力、自分をコントロールする能力などもこれに含まれます。

社会的な要因とは、人間関係や経済的な背景などです。身の回りの人との人間関係は心を揺さぶります。友達関係や親子関係も影響します。またお金の不安なども影響します。

課題に対して支援が必要だと思われる事象を単にストレスだけで説明したり、脳の疾患だけで説明したりすることは現実的ではありません。多面的にアセスメントしてその子に合った支援の手立てを講じていきます。学校と家庭だけではなく、医療機関やスクールカウンセラー、児童相談所など専門職の方々と連携することで手立てのバリエーションが増えることが期待できます。